

子どもが自分らしく生きることを願って

玉木喜美子

卒業式

愛育養護学校の卒業式は、毎年「春分の日」として行われます。昨年度は、五名の子どもたちが卒業を迎えました。在校生が二十数名の小さな規模の学校です。学校の中心に位置するホールに卒業生とその家族、職員が円形に座り、在校生と保護者、実習生らの見守る中、一人ひとり名前を呼ばれ、校長の前に進み出て卒業証書を受け取りました。子どもたちの卒業遠足の時の記念写真と日常場面でのその子らしい表情の写真をパネルにしたもの、そしてアクリル絵の具を使って制作した個々の絵画作品が紹介され、記念として贈られます。彼らも先輩たちの卒業式に参加し、卒業の光景を見てきました。

今、皆からの温かい祝福を受け、子どもたちの顔は期待に輝いています。中学生になるのだという前向きな意欲が感じられ、実に堂々としていました。在学中は、それぞれの子どもが本当に自分らしく、個性を発揮して活き活きと生きることを願う学校生活と共に過ごしてきました。

子どもたちは慣れ親しんだこの学校を巣立ち、新しい次の場所へと一歩を踏み出しました。個性豊かな一人ひとり、この学校の雰囲気をつくるのにひと役かかってきました。大袈裟に聞こえるかもしれませんが、彼らが卒業し、長い年月担任してきた私には、また一つの時代が終わるように感じられ、寂しさや安堵感など、さまざまな思いが湧き上がってきました。

中学校で直面すること

愛育養護学校は港区にあります。私学の学校という性質上、子どもたちは東京都内はもとより千葉、埼玉、神奈川県など毎日通うには遠い地域からも通ってきます。その為、中等部のない本校を卒業すると、多くの子どもたちは地域の公立の養護学校や心障学級に進学します。この年も五名のうち四名が都立の養護学校に、一名が国立大学附属の養護学校に進学しました。

子どもの中学進学を控えた保護者は、学区を中心に公立、私立の養護学校、心障学級を何校か見学します。同じ公立の学校でも一校一校学校の雰囲気や教育に対する価値観が違うためです。進学先を決めるポイントは個々の家庭によって異なりますが、どの家庭でも子どもが喜んで通える学校ということとは共通していると思います。子育てをしてる中で大切にしてきたことや教育観に大きなずれはないかなどを検討し、子どもたちも体験入学を経験し、最

終的に学校を決めていきます。

愛育養護学校と他校とではさまざまな違いがあります。大きな違いとしてあげられるのは、授業の形態が全く異なるということです。本校には時間割がなく、子どもが登校してから下校するまでの間、子どもの自発的な発想で活動が展開しますが、他校では時間割があります。特に中等部になると、高等部卒業後の進路を視野に置いているので、作業学習（働く力の基礎を育てる）が授業科目の中に組み込まれます。そして授業は、教師が年間指導計画を立案し、教師主導の課題提供と環境設定、教材準備などをとにすすめられます。

物理的な面では、何よりも学校の規模が違います。本校は二十数名の家庭的な規模で、どの子どもの様子もわかる人数です。しかし他校では、小中高をいれると二百名前後が一般的です。その人数を受け入れる器（建物）も当然大きくなります。

そして、公立の教師には転勤があり、教育観も個々さまざまです。教師間で互いの教育観を突き合

わせ相談しながら授業をつくっていきます。私学のように学校の教育方針に賛同する方だけが入学を決めるというわけではないので、教師は親の多様なニーズに応えることを求められます。以上にあげたような大きな環境の変化が待っている中に、本校を卒業した子どもたちは新たな一步を踏み出したのです。

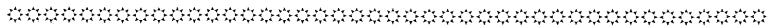
学校に行きたくない

四月になって新学期がスタートした頃、それぞれどんなふう to 学校生活を送っているのか、家庭の方からの報告を聞くことを楽しみにしていました。また、子どもたちがさまざまな違いに直面しながらも、中学校の新しい生活に前向きにチャレンジして、楽しく通うことのできる自分の場所にしていくことを願っていました。

一人の母親から、「しょう子（仮名）が学校に行くのを嫌がるのです」という電話が入りました。この子どもの進路については最も慎重に考え、進学を予定する地域の学校に、親子で何度も見学に行って

もらいました。本人も期待をもって中学進学を希望しました。しょう子は生まれつき、心室中隔欠損症という重度の心疾患を抱えていました。右心室と左心室の壁に穴が空いており、手術のできない箇所でした。充分に浄化されない血液が心臓から血中に送り出され、酸素が身体の末端まで充分に運ばれませんでした。そのため、体温の調節がうまくいかなかったり、特に寒い時期には顔色が悪く、手足が冷たくなったりしてしまいます。それに加え消化機能も弱く、体調が下降気味になると、食べ物を取り込んでも吐いてしまいます。

そのような身体状況にもかかわらず、しょう子の素晴らしさは、生きようとする意欲が人一倍旺盛であったことでした。生まれた時の状況が思わしくなく、医師からは、長くは生きられないだろうと伝えられていました。両親は「未来のことに目を向けるのではなく、今ある一日を楽しく喜びをもって生きられるように」と願い、子育てにあたってきました。生きることへの前向きさや人に対する信頼の気



持ちは、こうした両親の想いの賜物だと思えます。本校の一年生として迎え入れた時、何よりも大切にしたいと思ったのは、しょう子のこの輝きでした。

愛育養護学校では、子どもが自ら選んだ活動を深く掘り下げ、やりきることができるようになる大人がサポートするという授業の形態をとっています。身体的に思うようにならないことがあっても、本人の自由意志をできるかぎり尊重し、生きる意欲を損なうことのないよう心がけてきました。精神力が身体を支え引っ張っていく様子が、しょう子を通して体現されていきました。

前向きに生きようとする意欲こそが元気の源なので、大きな環境の変化により、ストレスが身体面はどう反映されるのか予測できない点が最も気がかりでした。小さなしょう子にとって、中学校は大きなものに映ったことでしょうか。クラスメイトとの身体の差も歴然としていました。相手の子どもが興味をもって近づいてきて、その触れ方の荒々しさに萎縮してしまうなど、中学校での生活は驚きの連続だっ

たようです。また、現在の活発で明るく元気な様子しか知らない担任教師には、これまで両親がどんな想いで生死の際にいるしょう子を育ててきたのか、その過程を理解し、親の想いに心を寄せるのは難しいことでした。

中学校での学習の方向性は、「その子の望ましい未来像を見据えて課題目標を設定し、それに向かって努力する」という考え方を基本としていました。そのため、親の考える「今、しょう子が意欲をもってやりたいと思うことを充分にやりきることで、結果として本来備わっている力が培われ、発揮される」という価値観は、なかなか理解されなかったようです。個別指導計画を立てるための面談の席で母親が「まず、この子の心がワクワクと楽しく過ごせることを大切にしてほしい」と伝えると、担任から



は「もつたないですね」という言葉が返ってきたことに母親はがっかりしていました。こういった親と教師の間での、子どもを育てていく過程で何を大切にしていきたいかという価値観を共通の理解にしていく作業が最も難しく、時間を要します。初めて出会う人間同士であるから当然のことであり、両者とも子どもの幸せを願うてのことなのです。

しばらくしよう子が学校へ行くことを選ばない間、「いつでも愛育に遊びにいらっしやい」と声をかけると、週一回のペースで放課後に遊びにきました。自分が学校に行けないことが母親の悩みになっていることを感じているその表情は曇りがちで、何げない所作の中にも母親への気遣いが感じられました。家で過ごす毎日は、さまざまな工夫をしながらも、活力のあるしよう子にとってはもの足りず、母親と二人では煮詰まっています。

そこで、母親が授業中にずっと付き添うことを約束し、本人も納得したうえで一週間学校へ通いました。その直後の会話では、「一週間を過ごしてみ

て、しよう子の体力ではとてもついていけないことがわかりました。あれでは死んでしまいます」と話されました。一緒に授業を体験する中で得た、母親の実感のこもった言葉でした。その後、「毎日学校へ行く」という心のとらわれから解放された母親は、「週二回〜三回のペースがしよう子には無理がないと思います」とふっきれた様子でにっこりと笑いました。しよう子もそんな母親の変化をキャッチして、毎日行かなくてもいいのだ、本当に行きたいと思った時に自分のペースに合わせていけばいいのだと、心から思えたことでしょう。

学校とは……本当にその子らしい生活とは

九月にはいつの間もない頃、しよう子の母親から電話をもらいました。「この一週間、いろいろあったんです。うれしいこともありました！」と声が高弾んでいます。内容は次のようなことでした。地域の有料老人ホームに面接に行き、親子二人で週二日、午前中だけボランティアをすることになったこ

と、また今週は中学校に三日も行けたのだというこ
とでした。「老人ホーム!? なんて彼女にびったり
合った場所を探されたのだろう」と、この話を聞いた
私の方がうれしくなって、「しろう子さんがね、老
人ホームでボランティアだって!!」と職員のみんな
に言つて回らずにはいられませんでした。

しろう子が熱心にしてきたことの一つに、衣類を
畳み直すという活動がありました。学校の着替え用
の衣類かごから、たくさん衣類を全部取り出し、
それらを一枚一枚広げて重ねると衣類の山ができま
す。その山から一枚一枚をとって手元に広げ、もう一度
丁寧に畳み直すのです。三年生の頃から特に熱心に
時間をかけて行い、六年生まで続けた活動です。卒
業の頃には大人も顔負けするくらい、袖の部分の返
しなども上手に畳めるようになっていました。

しろう子の得意なことが老人ホームのおむつ畳み
などに活かされるのです。そして彼女の屈託のない
明るさが場に活気を与え、老人たちの心を和ませま
す。老人たちにありのままの自分を快く受け入れて

もらうことは彼女にとっても喜びで、老人の生活の
ゆつたりとした雰囲気心地よい居場所になってい
るようです。双方にとって、活かし活かされる関係
が生まれました。いま彼女は週二、三日のペースで
学校に通いながら、老人ホームでボランティアをす
るという生活を送り始めました。

ボランティアについてはもちろん学校の単位には
数えられません。老人たちに受け入れられ交流をす
ることからしろう子は何を学ぶのでしょうか。この安
らげる時間は、心にどんな変化をもたらすのでしょ
う。改めて「学校とは?」「自分らしく生きること
とは?」と考えさせられました。これからもしろう
子がどのような成長を遂げていくのか、楽しみに見
守っていききたいと思います。

今年も三名が愛育養護学校を卒業します。子ども
たちは前向きに今を生きています。私もまた、四月
に迎え入れる子どもたちとの生活に心を向け、子ど
もたちと共に、自分らしく生きることを目指してい
きたいと思います。

(愛育養護学校)